

## 博士論文全文の要約

博士論文題目：『ナイジェリアの都市イレ・イフェにおける「アーティスト」の民族誌的研究』  
著者名：緒方しらべ

本論文の目的は、ナイジェリア連邦共和国の都市イレ・イフェで暮らす「アーティスト」を事例として、彼らの作品、市場、生活に注目した民族誌的記述により、アフリカの一都市の「アート」について考察することである。

本論文は、序論、4つの章、結論という6部構成になっている。序論では、これまでのアート（芸術・美術）をめぐる文化人類学の研究が非西洋のモノ（造形）と社会との関係を明らかにすることで、普遍的なものとなってきた西洋のアートや西洋美術界を相対化してきたことを述べた。ところがこうした研究は、モノを中心とし、モノそのもの、あるいはモノとそれを取りまく人との関係に注目しており、つくり手である「アーティスト」の視点に焦点があてられることはほとんどなかった。そこで本論文は、都市で暮らす「アーティスト」に注目し、約23か月間のイレ・イフェでの現地調査にもとづいて、彼らの作品、市場、生活を記述・考察した。

第1章では、まず前半において文献資料を用い、イレ・イフェが「ヨルバ発祥の地」であるという言説とともに、その地の「アート」が「ヨルバラしき」を中心に語られてきたこと、そして、そのおもな舞台がフリースクール（ワークショップ）や大学美術学部であったことを概観した。これに対して、後半は現地調査にもとづき、現代イレ・イフェにおいてはどのような人が「アーティスト」であるのか、その枠組みを把握するために、36人のつくり手について、「アーティスト」という英語表現による彼らの自称に着目して検討した。そこで、イレ・イフェではヨルバ語も使用されているにもかかわらず、「アート」が話題になるときは、英語でしか成立しない言説空間が存在すること、また、「アート」は人びとの生活と結びついたグラフィック・デザインなども指すことを述べた。これによって、本章は、これまで語られてきたイレ・イフェの「アート」と、イレ・イフェで生活する「アーティスト」の視点による「アート」が異なる点を指摘した。

つづく第2章から第4章までは、筆者の現地調査によって明らかになった「アーティスト」について、より具体的に記述した。

第2章では、イレ・イフェで暮らす「アーティスト」の諸相を、彼らの作品の特徴と制作・販売の様子、暮らしと経歴から記述した。イレ・イフェでは、1) 伝統首長を対象にビーズ細工や木彫などをつくる人びと、2) 国内外のアカデミズムや美術市場、富裕層を対象に絵画や版画などをつくる人びと、3) 街の一般の人びとを対象とするグラフィック・デザインや教会の装飾などを手がける人びとが「アーティスト」として暮らしている。本章では、これら3つのタイプの仕事や作品、生活の特徴をあらわす15人を事例にとりあげた。そして、彼らが既存の様式を踏襲したり新たな作風をつくりだすこと、繁華街の店あるいは住宅地の作業場で作品制作にとりくむ姿や他都市で作品を販売する状況、さらに、個々が学校教育・徒弟制・独学で技術を身につけて「アーティスト」になっていく過程について記述した。これによって、イレ・イフ

エの「アーティスト」たちの多様な実践の様相を明らかにした。

第3章では、イレ・イフェの「アーティスト」が作品の販売によって現金収入を得ている点に着目し、彼らの市場を詳しく検討した。まず、「アーティスト」の経済的な生活の多様さをより具体的に把握するために、彼らと市場との関係に注目した。そこで、同じ「アーティスト」であっても、1)自分が希望する市場をもち、経済的に比較的裕福な者、2)希望するものでなくとも何らかの市場をもち、経済的に比較的生活の安定している者、3)市場はほとんどないが作品制作をつづける、経済的に苦境に立っている者がいることを、19人の「アーティスト」の事例によって示した。また、個々の「アーティスト」の意思や発言に着目することで、「アーティスト」が、「創造性」「独自性」「才能」「学歴」「資格」「訓練」といった彼ら自身の価値や基準をもち、しかし、「アーティスト」としての目標や希望と生活の不安定さや困難のはざままで暮らしている様子が浮かびあがってきた。

第4章では、イレ・イフェの「アーティスト」がさまざまな現状において作品制作・販売をおこなって生きていることについて、オンラインカというひとりの「アーティスト」のライフヒストリーと生活に焦点をあて、よりミクロな視点から検討した。その際、「アーティスト」について多角的に明らかにしていくために、第3章で検討した市場との関係や彼らの価値・基準に加え、彼らと周囲の人びとや制度との関係にも注目した。この作業のなかで、多様な作品を手がけるオンラインカが「アーティスト」になる過程において、また、「アーティスト」として生きていくにあたり、フリースクールや師弟関係、中学・大学における美術教育、海外の美術市場、さらに、地域社会における人びとの繋がりや相互扶助が重要な役割を果たしていることがわかった。また、オンラインカが好んでつくる作品とドイツのパトロンが求める作品が異なることから、アフリカ人の「アーティスト」による作品、つまり「アフリカ美術」が、他者、とりわけ西洋美術界との関係においてつくられていくことを指摘した。

結論では、以上の記述を通して以下の3つの点から考察をおこなった。

- 1)イレ・イフェの「アーティスト」の視点に立脚し、彼らの主体的な実践に着目することによって、作品を受容する西洋美術市場やアカデミズムの側がアフリカに期待するアートと、作品のつくり手であるアフリカの「アーティスト」の側が提供する「アート」が必ずしも同じではないことがわかり、西洋近代のアートの枠組だけではみえることのない「アート」の存在を指摘できた。
- 2)イレ・イフェの「アーティスト」の生活に注目することで、イレ・イフェの「アート」が美術教育や美術市場の点で西洋美術界と結びついている一方で、地域の人びととの相互扶助や地域の市場の点でイレ・イフェの「アート」が地域社会と結びついていることを指摘できた。
- 3)本論文は、モノのつくり手である「アーティスト」に焦点をあてる方法によって、一都市の「アート」と美術界や地域社会との関係を示した。アフリカ人の視点から「アート」を再提示し、西洋でうみだされたアートという概念を相対化したという点は、冒頭で述べた従来の研究への新たな貢献だと考えられる。